

琵琶歌

卷之中

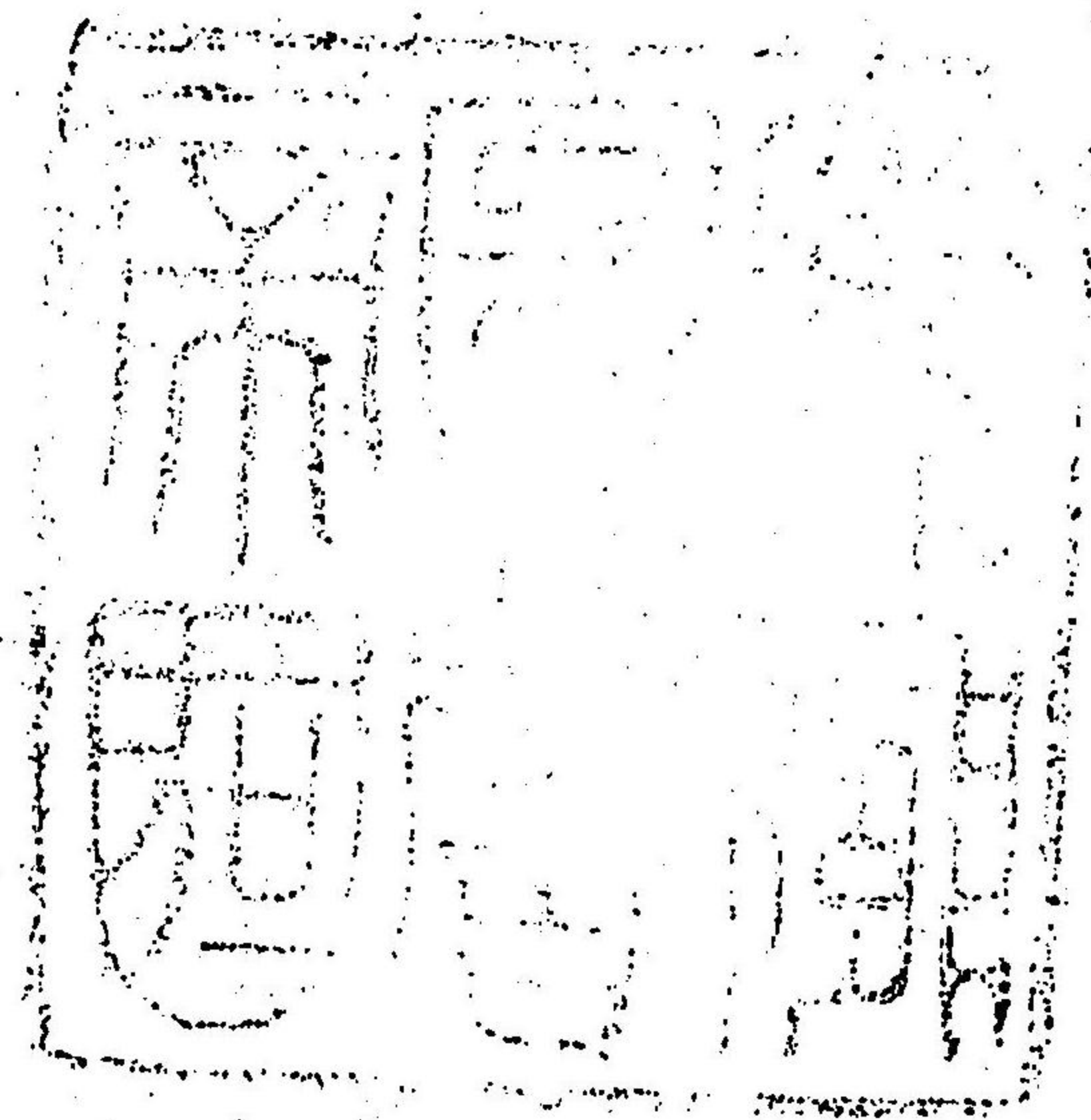
春之譜
春日野
月花
旺照君
川中島
月照
旅順口

次石兵六夢物語
軍神廣瀬中佐
軍神楠中佐
遠語
南山之後
上下

明音
確譜

223

693



特 85
814
新
酒

調

年の初め

昔の酒

笛と鼓の音

春の調

大平の

舞の

明治
38 6 21
内交

神の井垣の老松と

杖の連らね葉がらむ枝

うもたむの影高く

節が若にわつる葉の

常盤の色や類いふは

軒葉に咲ける梅の枝も

中 和泉式部の縁とた

床くしける窓のこゝろ

文見る袖にうつりくる

好又木の名に耻ぢす

又高砂ほろはの

中 干 松に相生の針と塩

妹背の契一葉あへ

子代のだんたにわさつ

四方の海原浪はかて

吹も静けは時津風

杖は鳴らすわがけの春

千秋樂たは民成さし

新歲樂には

命以延ぶる樂中祝

年毎に

今も汲み替す香も

知とけも祝ふ赤る

松籬こそ目出度けき

春日抄

下萌し出る若草の

下萌し出る若草の

歳の戸明けは秋津國

霞波する片雲に

月け残りと雉子鳴く

大千のののののののの

明けの友鶴君の代の

のののののののののの

壽祝の初聲に

南山を
栄へ久敷松竹の
落葉揺まらるる諸へ

遊ふ小川の菊の露

流きも匂ふ五百歳の

齡が息にかつる葉の

朝日輝く富士の山

是が蓬萊山とて謡いつ

七堂の山峯は

影が湖水に浸し

木々の梢も荒磯の

大千ののののののののの
月海上に浮かるとは

兎の走る浪の上

縁樹の影沈むとては

真木の登る風情の

五風十雨のけ代の春

西海に靡く時津風

春の治むるはけは赤き花

とあはれ下さる

けしき
はらぬはやくと目出度うけ
に

月夜

月と花と昔より

誰の

樂するやある

誰か懐はぬやある

大平の○○○○月夜も

心にきこ憂き事の

種とちれるも多しや

足柄山の松尾に

吹合せたる簫の音も

是より遠く舞出

軍とさきには火の音も

死ねの音も百所の

聞はれぬかたしや

勿来の関の暮

駒がとめて跡もなきは

都の空は花曇り

鎧の袖にちりける

櫻の雪は將軍の。

中平

長閑の霜より尚白し。

戦の枕に夜は慣れりて。

秋の哀きも知らされと。

越山月の、と白く。

雲間を渡る雁も。

都の空に帰る鳥も。

中平

思はれ残るも。

よの都はあきはて。

何れも我の身も並に。

く宵に想の宿頼む。

櫻の露に袖濡れて。

滅亡秋に極まりし。

平家の末も悲しき。

中平

侍の原の邊により

諫の言葉容れられず

筑紫の浦に詫言ひ

筑紫の浦に詫言ひ

は衣が押しも涙もる。

心の底は如何なるに。

十字が記す櫻々木。

戒の赤心が申さん下。

神がいの他言が要す一書

月の光やソラの香。

幾万年がふるとん心

中野に夢りはあは者か

常あは者日せの治乱。

月が見て酔びたは見て

眠るる木の平枕や

と一掃々夢人の言下

移る興廢存亡の

世の成行へ年常一は

去き世間を諸人よ。

真心が起し

月の光が東海の

月が光は輝し

名を譽はし

無書物に記すは尚

昔はしくすまふ

今の勤あり

斯言を斯くさせし後

樂に思はれり

たのしみなるべし

松頌口

黄龍

雲が平に記す

力も頼にすべし

満洲のむが高麗の

邊にあらす愈然と

幾馬の舞を東の向

殺せし勲功のあら

すや春に記す

の清にすまふ

○月○七○日○東○軍○下

○海○下○へ○力○入○朝○日○艦

○之○艦○初○瀬○に○富○士○の○島

又

○敷○島○の○島○の○島

○者○の○は○積○威○が○大○空○下

○艦○に○したる○軍○艦○旗

○高○く○掲○げ○し○る○其○又○は

○東○洋○軍○隊○の○戦○闘○艦

守る。撃つ。自をさる。

巡洋艦には高砂や

千歳、宮置、吉野艦

板又甲斐巡洋艦

出雲、磐手に各隻艦

八雲、津間や常盤艦

以上合せて十六隻

之に従ふ駆逐艦

すと降りくる村雨ト

淡々もつゝの白雲が

朝潮くるる速馬の

外に教隻連らあつて

誉が競ふ風情あり

ふ精銳が率いたる

聯合艦隊司令長官

東郷中將が初めとし

中すの思は事一はらへり

東は見え御宮下

山階、華頂の両宮は

御健氣にも将校を

職が奮てり浴ふ

け神聖なる艦隊は

^{町替}上げ金玉の牙より

下げ水舟とまると

ふのたぐには親にも別を

君の為に妻子が捨てし

忠勇義烈の六女あり

兼ねて期たると年來の

友世保があらた遠征の

錨が抜て渺茫たる。

八重の潮路に東の出てぬ

静よると處々に似て。

逸する時は脱兎の如し。

我艦隊は、ち早く

望る、八月の波に

舳艫は、堂々と

敵を早せし進みける。

大千の艦隊は兼るも

彼の掲揚と頼みたる

旅順の砲台の後ろに

水雷艇が前へて

陣形は、つら

守護をいひ、備ふるも

我は流石と認みし頃

渤海湾の戦に

腕に覺の火出た。

崩倉の村出す巨砲の擲丸

敵の谷から下打出す

互の砲お天地揺動し

濁巻の黒煙

旅順港外山は吼く

海は怒りて忽ち下

身の毛もまたつ修羅の坊

秋の機先に制せり

彼陣形乱きたる

波間成縫て我艇隊

決死の勇士の鍛錬

魚形水雷成殺すれは

相違はす命中す

具音傳へ浪があけし

見るくうちた戦闘艦

二隻の外に甲装の

六千〇〇〇〇〇〇

巡洋艦が沈た

其翌日に猛烈なる

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

総攻撃の鋒先に

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

霧の艦隊はあけられたも

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

或は右に沈み入れ

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

右往左往に逃げたりぬ

之より曇りに仁川

林艦隊は分遣し

瓜生少将之がすべ

隙がうらふ敵艦隊

の美事に打破り

英佛の艦の目の前

猛き功績が顕らげ

曇りにあふる東洋に

起すはふる神風

吹き拂らけれし雲霧

晴きて握らん海上

手にとる如き捷報

傳したる日は紀元節

勇みて祝ふ旗影に

老も若きも一齊に

只事歳と斗ふあり

天地も砕けむ計りあり

欺世欺天亦已欺

財心狼骨萬邦知

縱然自恃頑兇性

焉敵堂々仁義師

地圖が接して固唾呑む

我陸軍は兵

日毎に睨む日本刀

垂旧利重く影や

ウラルの山も母貝らむ

就鳥の翼も落せばさし

南山々後 上段

兔の山血汐北川

風醒き南山や

皇國のためと一筋に。

顧みしせぬ武丈夫。

身は戦場は骨と消え。

勇名はのち世に傳りて。

千松葉の歳時をせらむ。

敵の主力は注ぎたる。

金州南山の要害は

一夫守きけ万卒も

攻むるにまたけ峻峻たる

敵は地の利を頼み

はむに敵多き砲はす

地雷は許多地に埋かん

鉄條網塹壕にもあるは

防禦の要は構へ

寄せし日本の軍人

如何に雄猛く攻めくも

天に翔るの翅あり

地に潜るの術ありて

金城鉄壁に優りたる。

よの要害は破らざると。

公私と海りけり。

中千 我軍のつとまは傳へ

惟惟の將の思ふらへ

特におは百難は

犯す力のりよむのみ

後にはしこむ大君の

は稜威は頭たつたはて

只忠勇への筋た

盤根錯節が凌ぎゆく

皇の心のまはる。

たゆまず侵すぬカキ。

中千 攻むるの外はあらずと

よに屯山攻撃の激は本りぬ。

中千 戦ふ地は。

金州半島の形勝行て。

東西強國の軍隊の。

必死極死しをたけしん

中衛雄な互に決せむと

珠が争ふ双龍

我劣らんと競ふ時

榮入せよとの命令に

小川將軍の率ゐる

米四師團が左翼に備へ

中軍の米一師團には

は見宮が將となり

南^{より}山^{より}進み行く

之が統一たる奥將軍が初め

下士兵卒に至るまで

意は増々盛んたる

天が衝つて計りあり

斯く南山間近くは

敵の砲臺に方向は

砲尖がそむけ閑まし

待設けたる事な

敵と並下を戦す。

砲の響きもはくくも。

山はも山明かではりたて。

暗雲の急ち回顧はく。

乾坤晦冥紫電閃々。

彼も猛火は父ふも。

いそが我に敵す。

我揮丸は悉く。

要所くに曝殺し。

破壊の力極けは。

流石に烈くは敵軍の。

砲火も次第は衰へ。

勇敢世界も少したる。

我歩兵はくも見て。

脱兎の如く前進し。

雨の霰と降り来る。

砲火之中は物とせず。

敵軍はく押し寄せぬ。

されと敵は峻峻の
 高きに出もざるのみならず
 防禦殊にまじしけき
 我に乘すは機会ふく
 彼は地の利を頼みては
 能く追はざらば死守し
 絶す射撃は續くれば
 我猛烈なる突撃を
 被害のみ多くして

一時前進が中止せぬ

茲に大島將軍の率いたる

わの師團の一隊は

と軍の右翼にあつたる

彈藥將につまむ

長く戦ふもあつた

中
敵に向いては射撃が

實行せられた

兵隊後亦に収め

他に策をあらわれと
三八

我中軍方なる将率は、

唯方者の御為に、

進みて死あるは知り、

退きて生だぬる者はなく、

満身の勇気はさうたし、

決然突撃の拳に出ぬ、

全上 武殿

なる程也。

是業の勇は初めより、

揮丸雨下の間とて、

突撃の命下るは、

今や進一と待ちながら、

突撃の命下りしは、

誰の奮い起たせしむ。

意氣天は衝く勢に、

敵の陣地に可いし。

△△△△△△△△△△△△△△△

流血川に流す討り志

△△△△△△△△△△△△△△

唯怒り猪の筋に

△△△△△△△△△△△△△△

進むか知りて一足也

△△△△△△△△△△△△△△

後、引者更に志

△△△△△△△△△△△△△△

屍に乘り躡血に吸也

△△△△△△△△△△△△△△

勇氣に頓に百倍し

△△△△△△△△△△△△△△

彼我の劍尖相接し

△△△△△△△△△△△△△△

遂に南山の敵は打拂い

△△△△△△△△△△△△△△

歡聲年の郷道

大牛の烈なけむ斗にて、

各砲壘は轟きす。

旭の旗の翩翩と

夕空に、いやはや如

あ、眼新嘗脛指折りし

十年の恨々東の間に、

やゝ晴ふは時を事と

夏草茂は南山の

菩提の夢の安んずる

鞆目の空は雨なる

冷たく眠る武士の

高き功勳を思ふこと

かたし昔凍す時鳥

啼く血汐の昔より

忠と勇とに身成す

まゝの櫻も世にさる

大和魂語りつゞ

海の外までも言ひ傳へ

たゞぬ者こそはのり

たゞぬ者こそはのり

王照君

問はす一語

誰かやけとこの世に

身はかたき知れ

山時鳥軒と草

たゞぬ者こそはのり

斷きりは果はたな虫はと秋はの

別はれは霞はの命は惜はし

支はせし

風はにほすの窓はの燈は火は

悲はみ骨は髓はに徹はり未はこ

形はは憔悴はと衰はへ

只何事はも妹は脊はの契はは深は衣はの

薄はき縁は行はとさけ

哀はれ果は敢はは我は身はは

一はら君はと別はせ

遂はに相逢は事は得はず

たしむせし半は出はか火はの煙はは夜は

心はに

君はに逢はふ夜はの夢はは

世はの中はた物はを

我は業はを

昔はを

手は思は君はと

漢の都を以て

〇〇〇〇〇〇

御龍舟を以て

〇〇〇〇〇〇

殿に以て

〇〇〇〇〇〇

誠と為るべし

〇〇〇〇〇〇

流石傳ふべし

〇〇〇〇〇〇

如可人の心

〇〇〇〇〇〇

胡公の心

〇〇〇〇〇〇

東の都

〇〇〇〇〇〇

流石傳ふべし

痛むべし

樓子

歌

波と共

或る時

又ある時

あつた

馬の心

甘御

あつた

凡沙水音悉く腸を断る事也。

帝も今はずし召し。

御愁心歎のあはりたや。

奈も龍顔亦は涙。

浮はせ給ふ事ありとんや。

去せよまた。

徐言言の如くして。

再び召し返さるは沙情よし。

彼等唐土之事は杖の朝。

或は胡國東の朝に。

中
着は葛葉屋の夜は雨。

乾坤果里のたしき。

お思ふ事は舞をらす。

流水同じ水かき。

浪瀬の波はさかひ。

可事。

晴日下は年々腸を断る事也。

晴日下は年々腸を断る事也。

川中島 五月
武田信玄が徳川家康と戦った場所

川中島

天文二十一年

秋のころに徳川家康

上杉謙信と

八千余騎を従へて

川中島に於て

大干の戦は
我け方の戦は

武田信玄が上りて

親しく雄たけと

渦巻かす川

波に陣を敷いた

信玄

上杉謙信と

武田家と

名取固谷を戦はず

謙信家と

村と森南に雲い合え、

月影暗は出るの、

草葉の露が分けさせて、

彼方け方に兵が伏せ、

櫓に擬せし兵が、

出ると甲斐の兵が来た、

近くしむは甲斐の兵、

謀とは露知りず、

朝霧のしるしあり、

待交けたるは兵は、

時さき来きて勝餘波を、

ドツと揚けう、引つみ、

は衣に物を取る如く、

一騎の残す弁取たり、

雲霞の如くに御出せし、

静信の備へたて、井向、

龍おどつて雲が起り、

五五

五五

虎嘯して風が呼ぶ

勢が破れ牛の如くたて

入乱れし貴人の戦ふ有様は

興風砂埃をたて

百雷を振ると雷をたて

甲斐の勢が退けは越後の軍を逼り

越後の軍退けは甲斐の勢を逼り

大干
兵を合すこと十七夜

何ぞは勝とてさかす

引と見し言はる

一手の勢が旗をばせ

川を渡りしあり

隙を窺ひたしめはせて

出陣し△△△△△△△△△△
雨乃みよたる謙信

△△△△△△△△△△
麻毛本近く進み寄り

△△△△△△△△△△
面を振らす切て入る

△△△△△△△△△△
麻毛本の軍勢は

△△△△△△△△△△
思はぬ勢に破らる

走る跡の甲斐なれ

△△△△△△△△△△

鯨波を作つては

△△△△△△△△△△

守若美堂りてを見て

△△△△△△△△△△

猛虎の如く憤り

△△△△△△△△△△

憤馬を駆つて大音

△△△△△△△△△△

我手の執りて下知

△△△△△△△△△△

敵の横合

△△△△△△△△△△

無二無三の突か入つて

△△△△△△△△△△

潤瀬し。よすはひの

言古交をもい流しなれし

△△△△△△△△△△

謙言の舞

△△△△△△△△△△

赤栗毛の尾の舞を

大千の

可おまをの

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

かひも果たすお

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

言さか接ひに

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

軍配有に

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

團扇は

降らるみて傘の暇もあらず

河甲島の夕曇り水雨

と

謠ひし如く二の巻の日は

仲野 早肩先に切り込みぬ

あつとふらふと信ねる

命は若くは碎る

泡と消えんをまぢ

板はくさくさ軍兵

心は六牛た勇めと

仲野 水駛くは江守とす

大将原大陽

仲野 鎧かのはしと謙信が

突はいたまゝとあた突し

ささなまらしと鎧をあけ

思打たるとたつた

馬にあたりし馬逸す

謙信は駒が沈みと

手綱をくぐる其際だ、

信玄は、

虎口を遁き去りにけり、

鞭聲肅々夜渡河

曉見千兵擁大牙

遺恨十年磨一劍

流星光底逸長蛇

のく信玄が、

打渡したる謀信の、

心の中は如何なるか、

まゝに思ひやるたに哀れあり

信玄は、

肩の痛手にたゞゝねて、

其在の中は軍勢が、

まゝ出て出る月影に、

道を歩かざるはるゝと、

秋故郷たゞのりけり、

まゝに秋ふるまひの帰らぬの

大名の夢物語

眼疾ある者は、

必ずし月の輝きを拝み、

心癒する者は、

常に鬼首の妖怪に魔憑はる、

若子が踏んで蝦蟇と驚馬を、

縄の捨てた方が見て、

蛇の蟠るものと膽を流すは、

皆是也、

じき舞踊の一本流るる舞

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

然也

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

本心集二ノ一

精神一騰魄欠くる事よけは、

何ぞかよりの邪氣は、

妖怪の目鼻をよせしむ。

あつちのあつち

あつちのあつちのあつち。

兎角之眼、鏡目の猿和尚の危きものなり。

あつちのあつちのあつち。

中世の中世道にさかたれ、魔の蟲原。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

無面相のあつちのあつち。

あつちのあつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつちのあつちのあつち。

あつち。

中世のあつちのあつちのあつち。

兵の標をたぞけよ

おびあらずに言ふ様は

おれにやとぞおのの聲を

可の用事あり

我道行くまゝにや来り

ふ所おの目へ

我こそは鞍馬大狗の聲にして

申す 爾問ふ所おのの聲を

は吹育ちの聲をなれ

申す 自然に備はる自慢の力

相模はげし常陸より習ふた

ふ試に勝負し

が足踏んておのれは

じき又合ふお

首に刀を打たお

いふおのこたはれ

申す へいふおの事年が

突くとすれは手しの脇に腕る

是は仕立てと岩の角。

松のよき根は、この程也。

申す
切リた、ら、つ、せ、い、甲、張、り、か、ら、

兵、つ、い、今、は、口、を、敷、き、す、ら、ん、

大、手、を、廣、け、て、捕、入、り、す、れ、は、

小、坊、ま、早、く、俯、せ、

曲、り、尻、が、鋒、と、り、

糸、尻、紅、を、打、張、り、

ふ、ん、と、お、相、髭、す、ら、ん、

出、崩、し、
伏、勢、が、一、段、に、ド、ン、と、
勢、

し、け、籠、に、松、の、下、

敷、の、り、ち、ぶ、り、大、手、の、上、

黒、い、小、坊、ま、赤、味、坊、ま、白、い、小、坊、ま、青、い、小、坊、ま、

其、中、に、色、の、口、は、く、赤、ま、白、は、く、青、ま、黒、は、く、

七、重、八、重、

九、重、の、ま、よ、く、の、田、女、

已、の、同、形、の、敷、

手、拍、子、を、打、つ、と、い、ふ、と、早、く、早、く、早、く、

中千 頭陣より踏み折らる。 七田

道の序へ半と倒せし城。

惜しむるに人なきはけり。

故きを味と目撃しぬ。

いかに首屋の事欠せし。

後にぞ思ひ知らせける。

まじりに思ひ知らせける。

軍 神 橋 少 佐

奥大将の下にある。

大島従隊の関谷聯隊に。

首山屋の激戦に。

橋本隊長が死す。

その大畧が書かれてる。

まじりに思ひ知らせける。

大千〇〇〇〇〇〇〇〇〇

明治二十七年七月

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
名原聯隊長が死す。

〇〇〇〇〇〇
遠陽一の部隊は

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
～
〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

損害は多し。

終日苦戦は止らぬ。

大島將軍は予備隊の

岡谷聯隊を呼ぶ。

中干

先登部隊の定はれる。

楠大隊は突撃を命ぜられ

崩れ下すや兵士は下る。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

獅子奮怒の鯨波の勢

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

大地も烈はけを干らる。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

銃丸はけしけし出ず。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

鬼沖を擡ぐ杖兵。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

苦戦に苦戦を重ねては

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

功少ゆへに害多し。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

以時楠大隊長

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

大喝一声叱咤し

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

群を散らす左に

右平肩先よりいへり。

深平深平攻負いたせり。

縦容自若ゆの如く。

敵情具たに見てあるぞ。

内山軍曹評いけり。

中隊長より危剣あり。

遠慮せよとけぢ合。

一時退ちよせられは。

大隊すて全滅せん。

け時大隊長は。

涙が押さへ剣が撫て。

部下の斯くは倒るべ。

是に己をばせしむるは。

吟替
▼陣一軍曹

▼五月八日午後十二時

▼想を多しと思ひしは。

▼東宮殿上には幾千の

其へたは御殿の田に於て

部下の死を恨みおぼえて

漸く死を敬懼す

見捨て彼を禁じたま

おぼへて中念を起す

部下軍曹の死を

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

部下の死を恨みおぼえて

轉ぶる如く扱はおり。

小松原より一里あり。

中平 諸の敵陣に

腹の胸を破るは扱はおり。

再んかきしは破るは扱はおり。

暫くあつては破るは扱はおり。

あつかく空に扱はおり。

来りしは破るは扱はおり。

あつかく空に扱はおり。

大内喊のあつては破るは扱はおり。

目と見聞は破るは扱はおり。

目と見聞は破るは扱はおり。

敵のあつては破るは扱はおり。

大平 〇〇〇〇〇〇〇〇

大内長殿は破るは扱はおり。

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇

東宮殿下の御舞下

第一節

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ

おどろけおどろけ
おどろけおどろけ

おどろけ

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

夕の都の秋はさかづき

波影の岸は浪はさかづき

操もいつの深みぞり

色は変らぬ古柳は

中干

駅路は越へて香椎湾

多々羅の橋を打渡り

ふけの松原ふけふけ

ふけの松原ふけふけ

千歳の松にもさかづき

神に歩みを箱吹く

社にけし四ツの文字

筆の主がく問は

延喜の帝果

御手は下し

爰とせしはるるみ

るる白浪

昔は忘

恨み浦曲の片

メメメメメメメ

灣水城の帯

吾身に着けたる心

かゝ博士の殿住居

たの使

大平

沖の

心細

誰の

たよる心は坂茶涼。

への外に井のりて、

語々々々々々々々

浪路したるおらるの園、

せきよふ下りてきたる井下、

ゆられくたく先は、

黒の瀬戸ふかきしや

頼て麻見島よまの鳥、

翼ちびて潜みし。

中干
また木枯におらるて

田向かかへるおらるて

日よめを日おのりて

傾むく月と諸もよ

照る心よかて照るおらる

中干
身は女君のたよるて

十た一人の藤は麻平人

おらるる縁にたよる世下

樂々々々々々々々

心の世に流るる

中平 公瀧川を潮

行けり程よく茶屋を

はよの淵をけり

坐りし昔は

思ふ平の堅城あり

よの搦手成面にか

中平 棟高き二階あり

よの京に鳴るとは

初巻より題あり

松順の死あり

白海に雲あり

名をよみ戦た

廣瀬海軍中

立里遊女の戯

弱き助け

新小富の男

に愛ふ

本意すべし従ひては成すべしと申す

都より警備の

普濟の功其意不承す

身を海軍に奉せしむ

素意のよみ散居に

中干渡忠勇の將と云ふ

温厚篤実の者よと云ふ

抱負雄偉の後傑と

先曉巨大の猛士と云ふ

露西軍下遊ふこと五年にて

中干

此土人情の探究す

客の將校はおしなて

中干は教む交り也

結りたるみするあり也

中干お井に圃の意の常す

近く居られて珠の外

いづくもわかれて知るべし

士度ふがしなもたかむ

秘密機刺の門やすら

開いて具したホかれぬし

時に中法の日を期して

日本に帰るの途に望み

勇將也掃は手びらりて

別きと惜しむ熱涙は

髪髪丹小きくみ涙は
中干

運歩の裾を濡しけり

帰朝の後日

軍艦釣りの水雷兵

兼分隊長に補せしめぬ

うして日露の危局を急を告ぐ

漸く出征する人先立ちて

軍歌を作りて水兵小

唱けしむつ、勇気をは

中干
一やのよしの鼓舞せしむ

大干〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
極て松順の閉塞は

〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
ハけ有馬の友とちと

大方策と案出し、

一死を以て争らざらん。

覚悟極めて熱情を、

聯合艦隊司令長官、

東郷中将は云ふ云ふ、

幕僚の諸將に運るる、

何きも、を賛同し、

二月八日艦隊平後、

敵の力の殺らぬ見、

五隻の汽船に名塊を、

満載せしめて第一、

中干

松順の閉塞が実行す、

中佐は報急丸の長となり、

有馬中佐は初と、

糸原正木の両大尉、

鳥崎中尉の各指揮官と、

崩し、七十一人の銃兵と、

松順を指して突進す、

△△△△△△△△△△、108

敵は四ヶ所に夜討たる

△△△△△△△△△△

探海燈を輝かし

△△△△△△△△△△

海面隈より照し見た

△△△△△△△△△△

別塞船より密知らす

△△△△△△△△△△

若小家の軍より水馬小

△△△△△△△△△△

發馬よりれり如く

△△△△△△△△△△

周章狼狽を犯す

△△△△△△△△△△

戦闘艦を揮丸に

△△△△△△△△△△

霰の如く打出す

有馬中佐其他の尉官

△△△△△△△△△△

物よせすに乗り切て

△△△△△△△△△△

要所を爆沈す

△△△△△△△△△△

報小丸も勇気散す

△△△△△△△△△△

東口目撃して猛進すれは

△△△△△△△△△△

激烈なる敵撃は皆報國丸に集中す

△△△△△△△△△△

火薬燃料を焼くをとする計

△△△△△△△△△△

敵の艦を揮丸に

△△△△△△△△△△

我燃料を爆費す

大評〇〇〇の〇〇の〇〇
 福井丸の機関長は
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 初と中佐に別年が懐く
 〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇の歌を〇〇〇〇〇〇
 〇〇〇〇の歌を〇〇〇〇〇〇
 矣いふと小筆さなり。

死生有命不足論

鞠躬唯應酬至尊

奮躍赴難不辭死

縱容就義日本魂

一世義烈赤穗里

三代忠勇楠子門

憂憤投身薩摩海

慷慨就刑小塚原

或為芳野廟前壁

遺烈千年見鏃痕

或為菅家筑紫月

祠存忠愛不知冤

可見正氣滿乾坤

一氣磅礴千古存

嗚呼正氣畢竟至誠字

嗚々何必要多言

誠哉誠哉斃不已

七生人間報國恩

真末小

初并丸を指揮し

再び松吹の閉塞小討

回作を録し

石田横園長に贈る

中干
夜漱即丈と記され

贈られし誠あり

誠哉即ち中佐少

中佐は誠の仁才あり

石田横園長に贈る

誠哉中佐少

有馬正木の前指揮夜と

本林中尉との分乗し

山崩△△△△△△△△△△△△△△△△
遠征隊水雷艇隊中佐少

敵の真形次第的に

大研○○○○○○○○○○
船は進みだしたたり

○○○○○○○○○○
中迄は既に目的だ

達し終つて猛卒だ

ポートですすく移ら

け時行ゆの見える

心を痛むるが

沈没船に力返し

すみりすみを探せ

中干

影の影を傳す

うする内に海水

上甲板を蹴えす

己の船をポートに

跡見のさばる

××××××××××
水底をさす

大干○○○○○○○○○○
島のたてあつた

○○○○○○○○○○
我をさす

○○○○○○○○○○
漕ぎかた

瞬く暇のなきまじり

涙のけしきに浴させぬ

救世の權に碎るまじり

小池機関兵はうたきたり

吟

地圖を片平小剣を撫て

杉那は惜念にあらまじり

悲もあはたさくまじり

涙和して口籠りぬ

けしき長歌よみ

潮をあふまおしは

忠義の熱情と

丹心報ふ肉片に

形見とあはせぬまじり

辭せ中後海潮の

あつた何そけり

斬るの百鬼のたぬ

女舊の形を假らぬ

中平 悲しむまじり

板井の水に牙も筆も。

洗ひちたてとりあり。

意氣元來吞敵軍

瀝將熱血策殊勲

忠魂不死護皇土

昔有楠公今有君

け君を神とたて仰ぐは

外小神一系神はあまの

二平向吊ふは涙あり。

集合とめぬ軍は、

中干く戦火をともすや否や。

皆同音小憤り。

け仇報けしとていふは

可きも劣らぬ百戦や。

勇はそこの将卒の。

松原の空を白眼しけり。

天地もたふに感動し。

まゝのこゝろに鬼神もたふすべし。

滅とあるがけ者き。

軍ゆ中後と平心かな一可。

糸に尽たさくはなる。

鏡とさうとあつていへ。

盤史のあつていへ。

此のたはる梅檀の枝高のなるは
あつていへるはあつていへるは
あつていへるはあつていへるは

珠の器とあつていへ

あつていへ

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

地獄と餓鬼と我のあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

あつていへるはあつていへるは

旅は頼む。

はるはるの長旅

まじりまじりまじりまじりまじりまじりまじりまじり
とある果てたる旅は安けり

譜

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

XX地妙の变化

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

♪ 妙の終りを告ぐる下ける

吟音・崩の中

付十

付地

禪者之心得

禪者中歌への心得を以てするもの

一節一凡て自然を貴ぶもの

一禪者中の体と真並ぶもの

明治三十八年六月十日印刷
明治三十八年六月十日發行

編纂者

宮田秋堂

發行者

又間安次郎

不許複製

大坂市南區心齋橋筋安堂寺町西入

精華堂書店

發行元

精華堂書店

(電東三三六三番)

下編豫告

松新、墨绘、河内宿、

威海衛、新閉塞隊、

吹雪隊、毒餌頭、

井内侍、新九連城、

新上村艦隊、

(以上近日出版)

